

# 広島県立美術館館蔵品データベース構築について（事例報告）

## Constructing the Database of Collection of Hiroshima Prefectural Art Museum

福田 浩子

Hiroko Fukuda

広島県立美術館学芸課，広島市中区上幟町 2-22

Hiroshima Prefectural Art Museum, 2-22 Kaminobori-cho Naka-ku, Hiroshima

あらまし：広島県立美術館は、2011-12年に館蔵品データベースを構築した。これは館内の行政LAN上で学芸員が使用する管理用データベース、web公開用データベース、そして館内来館者閲覧用データベースの3つを諸事情のために非同期連動させた画像を含むデータベースである。今回は、行政LANの制約のためにデータ更新内容を同期連動させない当館の新データベース構築事例を紹介したい。

Summary: Hiroshima Prefectural Art Museum constructed the database of Collection in 2011-12. It is constructed by three image databases as the management database, the database for website, the database for museum visitors, those are asynchronous and interlocked. Here I introduced our case of database construction.

キーワード：人文科学，データベース，画像データベース，美術館，web公開

Keywords: humanities, database, image database, art museum, website

### 1. データベース構築の契機

今回の作品データベース構築については、厚生労働省による雇用創出基金事業の緊急雇用対策一般公募事業のひとつに、有限会社アイ・ティー・エスによる「広島県立美術館収蔵品検索サイトの構築事業」が選定されたことから始まった。同事業の提案者は、前述の有限会社アイ・ティー・エス（代表取締役：田川育伸氏）で、同社は企業独自のシステム構築を主に行っている広島市内のソフトウェア開発会社である。それまで当館との事業実績はなく、当館側も予期していない事業案であった。公募選考途中以降に設けられた当館側の担当が筆者であった。

緊急雇用対策の事業であるから、データベース構築の各工程において雇用を生み出すことが目的のひとつでもあり、システム開発を中心的に行った田川氏をはじめ、美術館側との各種調整役の藤原氏はもちろん、多数の外

部の方の力をお借りして、今回のデータベースが作り上げられた。

### 2. 今回のデータベース構築以前の状況

昭和43(1968)年に開館した広島県立美術館は、平成23(2011)年度末現在で4,399点の美術作品および美術資料を所蔵し、保管維持すると同時に展示の用に供している。平成8年のリニューアル・オープンを控え、広島県ゆかりの美術作品、1920-30年代の美術作品、日本を含むアジアの工芸という3本の重点収集方針に則ってコレクションの充実をみた。平成2(1990)年以前の館蔵品に関する情報は冊子体の目録に掲載されていたが、それ以降の収集品についての情報は作品台帳と作品カードが主力であった。

#### (1) 作品台帳

台帳記載の項目は、受入年月日、作者名、生没年、作品名、制作年、納入者、購入価額、備考である。場合によって各作品の担当学芸員が追記している場合がある。

## (2) 作品カード

作品カードの項目は、表面に大分野、中分野、備品記号、中分野の作品番号、員数、作品名、制作年、寸法、材質技法、制作者、制作者の生没年、所属、納入者（納入者、寄贈者、その他）、備考、写真貼付欄、写真管理欄、裏面には参考文献、使用歴欄がある。

作品カードとポジフィルム、その他の関連資料（主な素材は紙）はカットフォルダーに1作品分ずつ収め、カードキャビネットに収納して管理している。また、作家＝制作者についての情報は、別に作家ごとのカットフォルダーを使用して保管している。

## (3) 冊子体の館蔵品目録

冊子体として最後に印刷・発行された館蔵品目録は、平成2(1990)年発刊の館蔵品目録である。これにはそれ以前に収集した計1,594点がモノクロ写真とともに収録されている。現在とは分野ごとの作品内容や作品数がまったく異なっており、現状の主要コレクションの多くが掲載されていないため、すでに役割を果たした目録といえる。本目録発行に前後して、リニューアル・オープンに向けて重点収集が開始されていたが、新たなコレクションの情報を一覧できる目録は現在までついに発行されていない。

## (4) 館蔵品データベースシステム

当館は平成8(1996)年リニューアル・オープンにあたり、館蔵品データベースをはじめとして各種の機器を導入した（経緯と詳細については、角田新「広島県立美術館の情報機器について」『広島県立美術館研究紀要』第5号、2001年）。なお、当時の館蔵品データベースについてはp.3に記述がある。

その次段階として、平成18(2006)年度以来、今回のデータベース構築まで使用してきたデータベースが富士通のMusethequeV3 Light/SSであり、現在も館内公開用館蔵品検索システムとして稼働中である。今回新たに構築したデータベースとの関係については、後述する。Musetheque自体は博物館・美術館資料の管理に特化したデータベースであるから、本来ならば館蔵品すべてをこのシステムで管理すべきところであった。しかし、そう

ならなかった大きな理由のひとつは、広島県庁の職員が使用するネットワーク（以下、県庁LANと呼ぶ）の制限によって、Musethequeを接続することができなかったことである。そのため、Musethequeは日常的に更新が必要な作品管理には充分活用できず、館内の図書室に設置された来館者用作品検索システムとして稼働している。

## 3. データベースの枠組み

今回のデータベース構築に当たっては、当館で使用中の来館者用データベース Musetheque を残すこととし、管理用データベースは県庁LAN上の各学芸員のパソコンで使用できること、かつ、インターネットを使用した当館ホームページ上でもweb版館蔵品検索システム(web公開用作品データベース)を公開することを目標に、「仕事に使える」データベースの構築を目指した。

そして、3つのデータベース

管理用データベース

館内公開用 Musetheque

web 公開用データベース

を連携させる方針がアイ・ティ・エスより提案された。

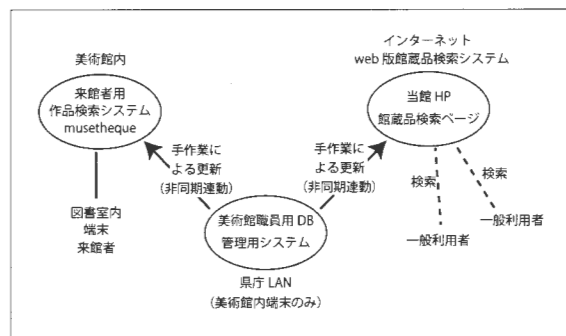


図1 データベース関連図

このような複数のデータベースは変更内容が随時同期されるのが常識的だろう。しかし、学芸員が使用しているパソコンが県庁LANに接続している事情により、管理用データベースの更新内容は他の2つのデータベースに同期するのではなく、ハード的に切り離した状態を維持し、更新作業はUSBメモリを介して手作業で行うという、あまり例のない方法をとることとなった。webデー

データベース公開後の更新作業は、年間数回、必要に応じて担当者が行っている。

#### 4. web 公開用作品データベース

インターネットを使用できる環境ならばどこからでもアクセスして当館の館蔵品に関する基本的な情報を得られる web 公開用作品データベースは、当館にとっては初めての試みであった。

データベースへのリンクは、当館ホームページのトップページと、所蔵作品展タブのすべてのページに置いた。トップページでは、右カラムの所蔵作品紹介枠の下に館蔵品データベースへのバナーを貼っている。

館蔵品データベースに入る前には、当データベースの定義内容、著作権について了承したことを確認するボタンを押すこととなる。このため、各作品情報の html ページへの外部からのリンクはできない仕様となっている。また、館蔵品検索ホーム画面の背景には、当館を代表する作品である《伊万里柿右衛門様式色絵馬》2体を置き、web 版データベースへの来館者へ親しみを感じていただけるようにデザインを工夫した。

このホーム画面からは6種類の検索方法を選べ、各検索タブ選択時も他の検索タブが表示されており、いつでも他の検索方法へ移行できる。



図2 館蔵品検索ホーム

##### (1) おすすめ作品を見る

まず、「おすすめ作品を見る」では、当館を代表する作品群を一覧して、ビギナーや特に検索目的を持たない訪問者が気軽に楽しめるページとした。初期画面ではテ

キストで右上のボタンで「サムネイル表示」へ切り替えられる。また、同ページ「スライドショー」リンクからは「おすすめ作品」に設定されている作品が次々にスライドショー表示される。



図3 おすすめ作品一覧



図4 おすすめ作品サムネイル一覧

##### (2) 厳選30の作者を見る

このタブでは、30人の作者リンクから、その制作者の作品を一覧表示する。

##### (3) 作者名で検索

作者名での検索は、作者名の漢字と読み(カタカナ)による検索枠を上部に設けている。下部にあ行～わ行のタブを作り、作家名一覧からも選択できる。

当館は国内作家だけでなく、海外作家や海外の工芸作品を所蔵しているが、これらも「ウズベキスタン」や「エルサリ族、トルクメン」のようにカタカナ読みでタブ内リストに表示している。

#### (4) 作品名で検索

作品名での検索結果は、作者名同様に漢字または読み(ひらがな)の部分一致で30件ずつ表示される。

#### (5) 連想ワード検索

連想ワード検索は、アイ・ティー・エスによる提案により実現した、他館のデータベースにない特徴を持つ検索方法である。

作品名に含まれない、作品イメージによる単語が登録されていて、抽象的な言葉や文様、地名などでヒットする。ひらめきによる作品の印象が言葉として当てられているので、当然のことながら、時には検索者がイメージするものとは異なる結果となる可能性もある。

#### (6) 分野で検索

最後は分野別の検索である。大カテゴリーから小カテゴリーを選ぶと、検索結果として作品が30件ずつ表示される。

例えば、絵画内のカテゴリーとして日本画、油彩画、版画、水彩画、素描、パステル画、平面造形、拓本があり、工芸内カテゴリーとしては陶磁、染織、金工、漆工、木竹工、ガラス、七宝、人形、甲冑刀剣、その他の工芸といった主に素材による分類がある。

分野は、館蔵品管理のため使用している分類を採用している。なお、絵画カテゴリーの平面造形には、もしかすると別分類にした方がよいかもしれない写真や工芸的平面作品の一部も過去の収集経緯の中で含まれている。

#### (7) 個別作品ページ

上述の6種類の検索方法の結果、表示される個別作品の詳細ページには、作品の基本情報として作品名、作者名、材質・技法、寸法、制作年、作品解説の項目を置いている。学芸員が分担執筆した作品解説はweb版データベース公開時点で約150点掲載し、順次追加している。



図5 作品詳細ページ

左側の作品画像をクリックすると、拡大画像が表示される。web公開用画像は、縦横の長辺を500ピクセル、72dpiとし、電子透かしを入れた。

## 5. 管理用作品データベース

前述のように、県庁LAN上にある管理用作品データベースは学芸員が主に作品管理に使用する。web公開用館蔵品データベースや館内来館者用データベースの基礎データを管理するものである。

### (1) ユーザー管理

県庁LANにIDを持つ学芸員およびその他の美術館職員に、データベースへのログインは個別のIDとパスワードを使用し、それぞれの使用状況が管理者モードからは見えるようになっている。また、ユーザフループ管理として、カテゴリーごとにアクセス者を制限することもできる。

### (2) 作品情報管理

このデータベースの根幹である作品情報の管理を行う部分である。各作品情報は作者名、作者名(カタカナ)、作品名、分類記号、分類記号と組み合わせた作品番号から検索して表示できる。

作品情報検索結果として表示されるリストの頭のチェックボックスにチェックすることで、サムネイル表示や作品目録作成などに活用するためのcsv形式での出力ができる。

作品を選択するとその作品の詳細情報が表示される。

ページ1では、分類番号、作品名、制作年、寸法、材質・技法など。ページ2では、web版作品データベースの「連想キーワード検索」のキーワード、web版や館内検索の公開フラグ、「おすすめ作品」掲載フラグ、作品解説など。ページ3は、備考や貸出歴の記録となっている。貸出歴はさらに別ページでそれぞれのデータを記入する。



図6 作品詳細情報 1



図7 作品詳細情報 2

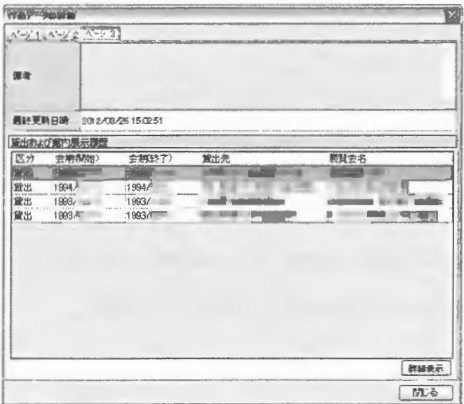


図8 作品詳細情報 3

このシステムでは、館内用とweb用にそれぞれデータをパッケージとしてエクスポートするため、画像データのファイル、そして作品情報(テキスト)の1件ずつのデータに対して、館内用とweb用に公開するか非公開とするか選択できるようになっている。この選択は各作品情報詳細画面でも行うが、公開フラグ一括登録画面ではリスト形式の状態公開・非公開の区分を変更できる。一多数の作品を扱う場合に便利な機能である。

### (3) 分類マスタ

分類マスタは作品の分類を整理して、作品情報に割り当てる基本情報管理である。館蔵品は美術館所蔵作品として管理されると同時に、県の物品管理規則に基づいた管理も行われるので、作品としての分類番号と県の物品という意味の備品番号とが併存する。この分類マスタは、作品情報を管理する際に、これらの分類や番号を扱う手間をできるだけ簡便にするものである。

### (4) 作者情報管理

作者情報を管理するページである。検索後に表示される作者のリストから作者詳細情報を開く。作者という名称ではあるが、作品によっては「アフガニスタン北西部」のように地名や民族名が作者名として便宜的に扱われている。館によっては、地名や民族名は備考欄に入れられるが、当館の場合は制作者情報としているため、このような処理となっている。

### (5) データの構造

このデータベースの構造は次のようである。

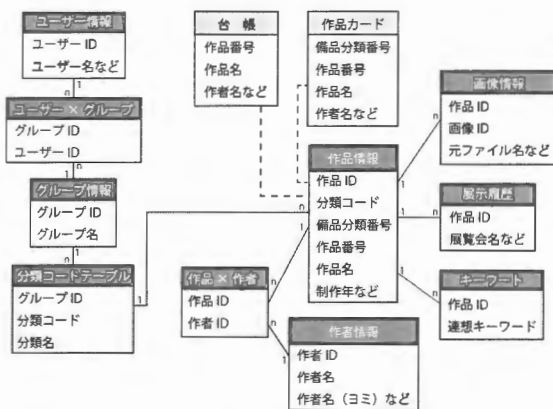


図9 データ構造の概念

実際のリレーショナルデータベースの各テーブルの項目はさらに複雑である。台帳と作品カードはデータベース内には存在しないが、登録データの作成にあたって基本情報となったものである。

## 6. EUC ビュー

管理システム内に登録されたデータは、データベース外から EUC によってデータ抽出ができる。EUC とは、エンドユーザーコンピューティング (End User Computing) の略で、一般ユーザーが生産性の向上をめざし、コンピュータを使い簡単にデータベースを検索・抽出することを意味する。管理システムを使わずに、Microsoft Access 等からデータを抽出し、Excel にデータコピーして利用することができる。今回のデータベース構築にあたり、開発者側からは基本的な作品情報や作者情報など、12 種類の EUC データが提供された。また、Access を通して登録データのすべての項目を抽出することができ、当初は予想していなかったきわめて重宝な機能である。

## 7. 管理システムのバックアップ

管理システムのデータのバックアップは毎月 1 回、管理サーバー内で定期的に行われている。管理サーバー内のバックアップなので、別媒体への退避は手動で行う。

## 8. おわりに

今回のデータベース構築によって、現在までの作品情報がデジタル化された。このデータベースを将来も活用していくためにはデータの追加更新を継続し、最新データを維持することが大切である。また、機器の故障や災害時にこれまで培ったかけがえのないデータを消失することをできるだけ避けるため、データのバックアップを心がけたい。データの保護という観点からは、例えば遠く離れた場所にサーバーが設置されている文化遺産オンライン等の外部データベースに参加することによって、一部のデータだけでも確保しておく可能性を考え、現在までのコレクション情報を文化遺産オンラインへ登録している。

本稿では、このデータベースの構築に関わる経緯や内容について記録としてまとめようとした。

著作権の問題や作品写真の有無により、作品画像情報は公開できないものもあるが、テキスト情報は可能な限り登録し、web 公開を継続している。当館の館蔵品に関心を持つ人が web を通じて情報に接していただくことを願う。作品情報の管理とその情報を web 版データベースによって公開することで、当館館蔵品の活用を進めることができると信じたい。

## 謝辞

美術品への理解と情熱をもって当データベースを開発された有限会社アイ・ティー・エスの田川育伸氏および藤原真澄氏、多大なる協力を得た当館総務課・学芸課全職員、連想キーワード割り当て等を受け持たれた加藤真理氏、データの更新および文化遺産オンラインへの情報登録に協力された向井知美氏をはじめ、お名前を記すことのできない館蔵品データベース構築と維持作業に関わったすべての関係者の皆様に感謝します。

## 参考文献

- 2001 角田新「広島県立美術館の情報機器について」『広島県立美術館研究紀要』第 5 号、広島県立美術館 ([http://www1.hpam-unet.ocn.ne.jp/htdocs/imagess/about/BulletinNo05\\_Kakuda2001.pdf](http://www1.hpam-unet.ocn.ne.jp/htdocs/imagess/about/BulletinNo05_Kakuda2001.pdf)) にも掲載。2013. 1. 31 参照)
- 2004 村田良二「東京藝術大学大学美術館収蔵品データベースの構築」、『アート・ドキュメンテーション研究』第 11 号、pp. 61-73、アート・ドキュメンテーション学会
- 2010 佐藤克己「新潟県立近代美術館・万代島美術館所蔵作品データベースの作成について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第 9 号、pp. 36-39. (<http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/collection/bulletin/09/sato.pdf>, 2013. 1. 31 参照)